令和5年度　学校評価

重点目標	❶	指導支援の充実　～楽しい（できた、分かった）学校づくり
	❷	安全で安心な学校づくり
	❸	教職員の多忙感解消　～教職員が元気で質の高い学校づくり

重点目標	❶	指導支援の充実　～楽しい（できた、分かった）学校づくり			
担当	具体的目標	具体的方策	評価結果	課題
幼小学部	習熟度に応じた段階的な学習指導を行う。	適切な実態把握を基に個別の指導計画、年間指導計画を作成し、家庭と課題や指導方針の共通理解を図る。	形成的評価を行い、各幼児児童に適切な学習内容を検討しながら指導を行うことができた。	引き続き、実態に応じた適切な指導を実践する。
中学部	生徒が日々の学習を積み重ねていく授業を行う。	主体的な活動を促す学習計画と身に付けたことを生かす学習場面を設定する。	生徒の学びに沿う授業改善を行ったことで、学習したことを身に付け、それを生かす姿が見られた。	授業改善を継続して行い、学習の積み重ねを行う。
高等部	生徒の卒業後を見据えた指導・支援の充実を図る。	進路意識をした課題設定を行い、生徒の自己選択を大切にしながら、主体的な体験を重視した学習を進める。	体験的な学習を大切に個に応じた課題に取り組むことで、卒業後を見据えた指導・支援を推進した。	より実態に応じた授業について、引き続き検証し改善していく。
訪問教育部	もてる力を伸ばす支援方法や興味・関心を広げ思考力を育む。	自立活動の目標を基盤としながら、各教科の内容を計画的に取り入れた学習を進める。	各教科領域を合わせた指導の中で計画的に各教科の内容を取り入れた指導ができた。	三観点評価の「思考」を育むアプローチを探る。
教務部	（幼小中）観点別評価を進める。（高）評価の仕方を検討する。	（幼小中）個別の指導計画の新様式を使う。（高）評価の仕方を各学習集団で具体的に検証・検討する。	（幼小中）観点別評価が定着しつつある。（高）次年度より新しい個別の指導計画の様式を取り入れる。	目標と評価を、個別の指導計画を基に懇談で丁寧に説明する。
研修部	教職員の能力や専門性の向上を目指す。	特別支援学校の教員として必要な知識、技能の習得、安全に関する訓練等の研修を計画する。	さまざまな研修を企画することで、教員が自ら必要である研修を選んで、知識や技能を習得することができた。	教員のニーズに応えることができる研修を企画していく。
図書部	読書活動への興味・関心の拡大や図書室利用の推進を図る。	図書への興味・関心を高める掲示や企画をし、図書室の利用や家庭への持ち帰りの推奨を呼びかける。	読書週間では、読み聞かせや図書の紹介・展示をするなど、図書への関心を促すことができた。	より多くのスタディでの図書の利用を促す。
教育情報部	生徒のタブレット端末の利活用を増やす。	児童生徒が主体的に授業でタブレット端末を活用できるように、職員へ授業実践やアプリの活用法の紹介を行う。	授業や児童生徒に合ったアプリや支援機器の提案、アプリの導入、支援機器の購入を行った。	教員のタブレット端末のICT活用力を高めていく。
生徒指導部	明るく毎日を過ごせるための生徒指導を行う。	現状の正確な把握とともに職員間での迅速・確実な情報共有に努め、学校として適切な指導を行う。	各部の指導や保護者との連携の状況を職員全員で確認し、学校全体で共通の意識をもって生徒指導に取り組めた。	迅速に情報共有をし、より速やかに指導にあたれるようにする。
進路指導部	一人一人のニーズに応じた適切な進路指導を行う。	キャリア教育の視点から幼児児童生徒の正しい実態把握をし、本人の意思と年齢に応じた支援を大切にする。	発達段階や教育課程に応じた進路指導を行うことで、生徒にとって有意義な活動となった。	その年の生徒の実態に応じた見学先や指導内容を検討していく。
保健部	保健や環境及び給食、医療的ケアについて学校全体で取り組む。	保健管理や保健教育に関する研修・訓練及び共通理解の場を設定し、教育活動と一体的に進められるようにする。	研修を行ったり情報を発信したりして知識を深め、指導に活かすことができた。	より学校全体として取り組めるように、都度情報を共有していく。
自立活動部	自立活動に関する専門性の向上及び指導内容・方法の充実。	校内の勉強会や外部専門機関との連携、研修を通して専門性や指導方法の向上を図る。	多くの指導者に相談会を活用してもらうことができ、専門性の向上や指導内容の充実を図ることができた。	専門家と連携を取りながら引き続き専門性や指導の向上に努める。
教育支援部	校内外の支援が必要な幼児児童生徒へのコーディネートを行う。	校内外にセンター的機能の取組や特別支援教育に関する情報提供を行い、連携、協働しながら支援を進める。	校内外の学校への相談活動や講義を行ったり、外部からの相談窓口を「つぼみ相談」に集約した。	校内の幼児児童生徒に向けた、支援体制の周知を図る。
寮務部	基本的生活習慣の自立を図り、生活適応能力の育成に努める。	食事・排泄・運動・睡眠の生活リズムを整え、衛生面や身辺処理等、基本的生活習慣のスキル向上を図る。	家庭と学校と連携を図り、一貫した指導を実施したことで、生活習慣や社会的スキルを向上することができた。	家庭と学校の間で情報共有を密にして協同しながら支援をする。

重点目標	❷	安全で安心な学校づくり			
担当	具体的目標	具体的方策	評価結果	課題
幼小学部	肢体不自由教育の専門性を生かした安全な指導を行う。	実態に応じた適切な姿勢保持、体位変換、摂食指導などを検討し、安全・安心な指導を実践する。	実態の変化に応じた手だての検討やヒヤリハット一覧の活用などにより、安全面も配慮して指導を行った。	肢体不自由教育の専門性の向上を図ることで安全性を高めていく。
中学部	安全で整った学習環境をつくる。	物の整理、施設設備の安全、教室、廊下等の美化に努める。	施設設備の日常の管理を十分に行い、安全で衛生的な環境を維持し、けがや事故なく過ごすことができた。	引き続き、清潔で安全な環境を維持できるよう努める。
高等部	校内外の連携を図り、安心安全に過ごせる環境づくりに努める。	保護者や職員間および外部機関との連携を図りながら、各生徒が必要な支援を受けられるように努める。	保護者、職員間および外部機関との連携を大切することで、状況に応じた各生徒への支援を行った。	先を見通しながら、計画的・組織的に連携を深めていく。
訪問教育部	多くの職員が訪問生とのつながりがもてるよう情報共有を図る。	本校訪問教育の現状を周知する機会を設けると共に、保健、進路指導等の分掌と連携を図る。	夏季自主研修で実際の指導の様子を紹介し、職員に訪問教育への理解を促すことができた。	所属学年とのつながりを意識的にもつようにする。

総務部	安全な学校づくりに取り組む。	物品の管理・点検を行い、事故等のないよう安全意識を高める。	管理・更新できるよう備品管理表を作成し、管理できる備品を毎年少しずつ増やしていくことができた。	事務と連携して、担当ごとに備品管理を行うシステム作りが必要。
生徒指導部	安全な学校生活を送るための防災防犯体制を整備する。	組織的・実効性のある訓練・研修を実施し、幼児児童生徒並びに学校職員の防災に対する意識を高める。	年度当初に計画した訓練及び研修は予定どおり実施でき、職員の防災防犯意識をより高めることができた。	有事の際に向け継続的に防犯防災マニュアルの改訂をしていく。
進路指導部	進路だよりを活用した情報提供を行う。	本人、保護者が進路の流れを理解し、適切な時期に家庭で準備できるように促す。	進路掲示板や進路だよりを活用することで本人や保護者が進路について考える一つのきっかけとなった。	事業所の情報を更新し、新たな進路情報を提供していく。
保健部	ヒヤリハット事例を共有し、教職員の危機管理意識をより高める。	ヒヤリハットについて認識を深め、積極的に報告を行う意識をもつよう機会を設けて啓発する。	定期的にヒヤリハット事例を集計して、全教職員で情報共有することができた。	ヒヤリハット事例の報告意識を高めるため、今後も啓発していく。
自立活動部	活動室や個人の所有する車椅子等の安全性や衛生管理に取り組む。	活動室の清掃や物品の管理、車椅子などの装具の点検を行い、職員の安全意識を高める。	保護者と連携をとりながら装具等の安全管理をしたり、活動室の毎日の清掃を通して衛生管理をしたりできた。	今後も安全意識をもって取り組めるように継続していく。
教育支援部	地域の繊維機関と連携した安全に子どもが活動できる環境づくり。	「みんなプロジェクト」において、生活に役立つ職員、保護者向けの小物制作研修会を実施、紹介する。	文化祭では、生活に役立つ小物などをPTAや外部機関と協力して紹介した。	PTAや地域の関連機関との協力体制を今後も継続していく。
寮務部	健康で安全に生活することができる環境や体制づくりをする。	実効性のある各種訓練を実施するとともに、舎生の個性や健康状態を把握し、安心して過ごせる環境を作る。	安全面や健康面に配慮した取り組みを行い、寄宿舎で安全かつ安心な生活を送ることができた。	一人一人の特性や個性を配慮した安全管理を今後も行っていく。

重点目標	❸	教職員の多忙感解消　～教職員が元気で質の高い学校づくり			
担当		具体的目標	具体的方策	評価結果	課題
幼小学部		効率的な業務の進め方を検討して実践する。	教材の共有使用など、内容が重複する業務は可能な限り精選して、業務量の削減に努める。	業務の効率化の意識をもち、教材については、共有での使用や次年度以降の使用も想定した作成に心掛けた。	引き続き、業務効率化に向けての具体的方策を検討していく。
中学部		教員の専門性を生かす。	それぞれの教員がもつ知見を共有したり、共に学び合ったりする。	知見の共有や学び合いが、教員の意識の変革、資質の向上につながり、生徒の変容が見られた。	部全体で情報や知見の共有を図り、効率よく授業づくりを行う。
高等部		職員が心身ともに健康で、働きやすい環境づくりに努める。	各職員が適正な在校時間で職務ができるよう意識を高めると共に、職務の効率化、分散化を促進する。	各職員の業務の効率化や分散化が促進することで、全体的に職員の退校時間が早くなった。	働き方改革への取組を検証しつつ、よりよい方法を模索する。
総務部		所在や方法に迷わず、効率的に業務をこなせるようにする。	「職員必携」を整備し、学校全体の大まかなルールを明文化して共通理解を図る。	「職員必携」に掲載する文書をとりまとめ、目次や冊子化を行い、次年度運用の準備ができた。	試用を行い、より使いやすいものに改定していく。
教務部		分掌業務の効率化	書類フォルダの合理化・効率化・整理整頓をする。(校務支援システムの準備含む)	校務支援システムの準備を進めた。	書類フォルダをより使いやすいように整理整頓する。
研修部		ICTを活用し、さまざまな働き方に対応できる研修環境を整える。	研究や教材・教具、ICTに関する情報をTeamsを活用し、学校全体で共有することで、教員の負担軽減を目指す。	Teamsの「いちまる研修部」で、さまざまな研修や教材など情報共有できるようにした。	Teamsの活用があまりなされていないので、工夫が必要。
図書部		図書室運営や蔵書管理の業務をスムーズに行う。	図書選定や受入・廃棄などの蔵書管理業務を図書部全体で行い、図書管理システムの維持と業務の効率化を図る。	50周年記念図書の受入や読書環境を整えるために、定期的に作業日を設けて、図書部全体で業務を行った。	学校司書の代わりに蔵書管理を進める人手と時間の確保が課題。
教育情報部		教員のICT活用指導能力を高める。	研修等を利用し、職員のICT機器の利活用推進を図る。	ICT支援員への相談や研修を利用して、ICT機器の利活用の注意点を確認することができた。	職員の情報リテラシーの向上が必要である。

学校関係者評価を実施した主な評価項目	❶的確な実態把握と適切な課題設定、学習環境の整備、有機的なTT ❷人権意識を高める研修の実施、環境整備(防犯、防災、衛生管理等)、開かれた学校の推進 ❸ICTの利活用による業務の効率化、整理整頓(フォルダ内、紙資料等)、教材等の共有化
総合評価	概ね目標を達成することができたが、項目によっては課題が残った。今後も、重点目標に関わる目標及び効果的な方策を掲げていく必要がある。保護者アンケートや学校評議委員の方々からの御指摘や励ましの声を職員一同で共通理解を図り、教育活動に活かしていくように取り組んでいく。
学校関係者評価委員会の構成及び評価時期	・構成…学校関係者評価委員(学校評議員)5名 　医療関係者、学識経験者、進路関係者、保護者代表、地域住民代表 ・評価時期…第1回7月、第2回2月